

④ 中田友太郎さん

【入信の道程】 52 中田友太郎氏

高木和上の随行として広島県にゆき、次の年、正化さんの米寿のお祝いの布教にいった。三日間給仕をしてくださった孫娘が、祝賀会の後「主人がお話を聞きたいと申しますがお願いいたします」「連れておいでなさい、ご主人は説教を聞いたことがありますか」「背中を向けて聞いていた人に気がつきませんでしたか」

「あれがご主人でしたか、りっぱなご主人を持ちましたね」連れてきたから

「あなたは説教を聞いたことがありますか」「寺が家やら家が寺やらわからんほど聞きました」

「どんな聞き方ですか」「今の住職と友達で、子供るときから寺で騒動して育ったのです。二十歳ぐらいのときは帳場に坐って世話までしていました」

「それがどうして寺詣りをやめたのですか」「誰の話も同じことで、わしの心を満足さしきらないからですよ。家内が夜帰ってきては「今度の話は普通の説教とは違うから聞きにゆきなさい」と勧めるけれども「歳はいくつくらいか」「研究科(大学院)卒業だから二十六、七歳でしょう」というから「口の周りに黄色い粉をつけている雛ではないか、連れてこい、俺が説教してやる」、「なぜ今日は参詣したの」「爺さまの祝賀会に孫の婿が出ないわけにゆかないから仕方なしに来たのだ。説教は下手じゃが実地のことを言われるので向き直って聞いたのです」

「どんなことを説教で聞きましたか」「この説教はよいと思つてご示談に会わしていただこうと思つて少し突くと、しどろもどろになつて答えきらないのだ」

「なにを聞きました」「一念の水際を聞けと言われますが、水際というのはどうなるのか、凡夫は晴れたか晴れないか、時がわかるのか教えてくださいと膝詰になると「凡夫は時はわかるものではない」というから「それなら水際はわからないで

はないか」というと「時間はわからないのだが、安心したのが水際だ」と雲を掴むような話で、言っている人も判然してはいないので」

「ふふん」といったら「あなたはどうか説明しますか」

「水際がわかるから聞けというのでしよう。角目があるから聞けというのでしよう。晴れたか晴れないか自分に自覚のない信仰は、調熟の光明の分際で、いつとはなしに話のわかったのを信仰が徹底したと自惚れているのですよ。それを第二十願の、法が他力で機が自力で、法の話聞いていただけだから水際が立たないのです。自分が救われていないのだから、救われていない前と、救われた後との区別がないのですから水際がたたないのです。」

第十八願の信仰は、墮ちてもいないで、頂こういただこうとあせていた自力が往生の望みの綱が切れたとき、自力が捨てたときは他方に攝取されているのですから、不安のときと安心したときと、晴れない前と晴れた後、疑惑仏智と明信仏智、自力と他力の雲泥の差があるので水際は判然しています。それなら実時がわかるかといえ、一秒の千分の一ぐらゐを一刹那といい、一刹那の千分の一ぐらゐを一念というのですから、分とか秒とかに掛からないのだから実時はわかりませんが、悩んでいたものが晴れたのですから 聖人は「たちどころに他力撰生の趣旨を受得した」といわれ晴れたが証拠ですから仮時ならわかるといます。信の一念は時ではなくていただいた味がわかるというので、仮にも地獄一定が極楽一定となり、三世の業障が一時に利剣で切り落とされて、安心できたかできないか、自分にわからないのは救われていない、晴れないからわからないのです。仏凡一体になっていないから、水際が立たないのですよ」

「なるほど、これほど詳しい説明をきいたことがない」

「そのほかに何を聞きましたか」

「信仰が徹底したら喜ぶるかと問いました」

「なんと答えられましたか」

「凡夫は煩惱があるから喜ばれるものではないといわれました」

「ふふん」「あなたはどうか答えますか」

「地獄一定が極楽一定になり、鬼が仏になる約束ができて喜ばれないのは観念の遊戯をしているだけで、実地に救われていないからです。死んでお助けなら生きている間は助かっているから喜びが出ないのです。聖人のお言葉に「是を以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり」とか「獲信見敬大

慶喜」とか「一念は、斯れ信樂開發の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰わすなり」とか、現生に十種の益を得る中に第七番目に「心多歡喜の益」とか「無上の信心を獲れば即ち大慶喜を得る」とかおっしゃってあるが、ちょっともその喜びを慶びきらないで、凡夫は喜べるものではないといっているのは自分が攝取されていないから喜べないのです。自分が救われていないことを発表しているのです。

化土巻に「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」と第二十願の行者を指さしておられるが、自惚れているから自分とは思わないのです。自分は何の苦もなく信後の行者と誤認しているのです。「専修にして」とは名号の独りばたらきとは聞いているけれども「雑心なる者は」とは、機の方を見ればどうもはつきりしないが、これでよいだろうかとの脚を踏むものは大慶喜心が得られないとおっしゃってあるが、真宗の道俗が機を見れば手間がかかるというのは、救われていないから機を見るのを恐れている第二十願の行者です。

第十八願に攝取された行者なら、法を見てよし機を見てよしだから大歡喜、大懺悔があるのです」

「そんなに判然わけて説明してもらったことはないが、歎異鈔には喜べないとおっしゃってあるではありませんか」「あれは信前の道俗とは桁が違うのです。算盤玉は一つはじいても、一の桁なら一、千の桁なら千で、その違いは九百九十九の差が

あります。人々が合点したのを他力廻向の信仰と思つて自惚れているのは信前の桁で、聖人様も唯円坊も身命を賭して求道な
さつたあれは信後の桁ですよ。それが七十、八十の老境に立つて、いざ死ぬとなれば極楽はいくら結構なところと聞かされて
も、生の執着があるからゆきともないといわれたので、信仰が喜ばれないといわれたのではありません。後生が一大事になり
苦になつて求道した人ならば必ず信樂開發します。後生が苦にならない人に苦が抜けたといえますか、自力を知らない人に他力
不思議に帰した喜びがありますか。疑つたことのない人に疑いが晴れたとわかりますか、他力の蓑に隠れて無力で居眠りして
いるのですから、晴れたも暮れたもわからず、死んだらお助けおたすけと善恵坊の味方をしていいるのです」

「それなら私は地獄ゆきですなあ」

「ふふん口の先ばかり」

「他人の心をよく見抜きますなあ、地獄ゆきといつたら、そのものをお助けといつてくださるだろうと思つていた。ほんとうに参れる柄でなかつた。駄目であつたか」といいますから

「駄目ならこそ唯なのだ」といつたら「あら、このままが唯か」と泣き崩れて大喜びをした。同行が後ろに集まっているのを見て、
「同行よ、向拝口を踏み破るほど参つても、角目を聞かなければ往生はできないぞ」と胸を叩いて大喜びをした。

つぎの年の二月に、近所に布教にいつたら、夕方「先生」と大声がするので障子を開けたら、両手を挙げて「万歳ばんざい万々
歳、何にもいらぬ唯だつた」

「這入りなさいよ」

「今日は親類の家の棟上で、今ようやく終わつたからちよつと顔を見にきた、今から自転車で一里の道を往復して、着物を
着替えて説教にまいります、さようなら」